

<原著論文>

[学生の精神衛生研究班]

大学生活の過ごし方のタイプとその心理的特徴に ついての検討 (5)

都 筑 学 早 川 宏 子
宮 崎 伸 一 早 川 みどり
永 井 暁 行 梁 晋 衡

Investigation about Types of College Life Perspective and
Their Psychological Characteristics (5)

Abstract

This study aimed to examine why personal relation type of students developed higher level of social skills and attain higher level of school adaptation than other types of college life perspective. The participants were 489 undergraduate students in Chuo University. They were asked to complete a sheet of questionnaire which consisted of the following scales; college life perspective, the degree of time use satisfaction in daily life, adaptation for college life, daily life skill, Ibasho, importance of daily human relationships. Using cluster analysis with scores of 17 college life activities by K-means method, six different types of college life perspective (Tsuzuki, etc., 2014) were confirmed. The obtained results showed that personal relation group constructed richer human relationships with different people and had higher level of social skills than other five groups. Latent structural modeling clarified that time use for personal activities had positive effects on enhancing directly school adaptation and also indirectly leading higher school adaptation via increase of social skills and social Ibasho-kan. Based on these findings, functions of personal relation activities in college life on school adaptation and forming social skills were discussed.

1. 問題と目的

本研究は、大学生生活の過ごし方のタイプにおける対人活動中心群が、なぜ社会的能力が高く、適応的なのかを明らかにしようとするものである。

都筑ら（2011, 2012, 2013, 2014）の研究から、大学生生活の過ごし方尺度（溝上, 2009）によって測定される大学生における学生生活の過ごし方には、対人交際を中心としている対人活動中心群、インターネットやゲームなどの活動が中心のヴァーチャル活動群、自主的な勉強を中心とした自主勉強群など、いくつかの異なるタイプが存在することが示されてきた。

都筑ら（2013）は、対人活動中心群や部活動・サークル活動にかかわっている学生ほど、コミュニケーション能力（藤本・大坊, 2007；大坊, 2003）やクリティカルシンキング（廣岡ら 2000, 2001）、ハーディネス（森・東條・鈴木, 2005）などの大学卒業後に必要とされるような能力が高いことを明らかにした。また、都筑ら（2014）は、対人活動中心群が他の群と比較して、学校への適応感が最も高いことを明らかにした。

対人関係中心群は、ヴァーチャル活動群、低活動群、授業出席勉強群、自主勉強中心群、高活動群などの他群の学生と比較して、大学生生活の過ごし方において、対人活動にかかわる時間が長いことが特徴的である。大学生生活における対人活動には、友人との関係、先輩・後輩との関係、教員との関係、家族との関係、学外の間人関係、インターネット上の間人関係など、多様なものが含まれている。こうした具体的な人間関係・対人活動のどの部分が、対人活動中心群における社会的能力の獲得や学校適応感に影響しているかを明らかにすることは重要な課題であると考えられる。

そこで本研究では、次のような2点を検討することを目的とする。第1は、対人活動中心群がその他の群と比較して、実際の間人関係・対人活動において、どのような特徴を持つのかを明らかにすることである。その際に、大学生が実際に取り得る具体的な対人活動に関して、友人、先輩・後輩、教員、家族、学外の間人関係、インターネット上の間人関係の重要性の評価という点から検討していく。第2は、大学生生活をどのように過ごしていくかという時間の使い方が、ソーシャルスキル（対人関係能力の自己評価）や居場所感（対人関係の状態の評価）を通じて学校適応感にいかなる影響を及ぼすかを明らかにすることである。

〔都筑 学〕

2. 方 法

2.1 調査対象

調査対象者は、中央大学に在籍する学生489人(平均年齢19歳9ヶ月, 標準偏差1歳6ヶ月)である。

対象者の性別は、男285人, 女204人だった。男女比は約1.4:1だった。全学(理工学部を含む)の男女比は2:1であり, その数字と比べてみると女子の割合が高かった。

学年の内訳は、1年187人, 2年146人, 3年111人, 4年39人, 不明1人であり, 都筑ら(2014)の調査と比較してみると, 1年生と4年生の割合が少なかった。

学部の内訳は、法222人, 経済9人, 商169人, 文2人, 総合政策87人だった。法学部が半分弱を占めていた一方, 経済学部と文学部の人数が少なかった。

住まいの内訳は、自宅293人, 自宅外196人であり, 自宅と自宅外の比率は約1:0.7であり, 現状をおおよそ反映した結果になっていた。

部活動・サークルへの所属は、体育連盟56人, サークル286人, 所属なし145人, 不明1人だった。体育連盟を含め約70%の学生が部活・サークルに所属していた。

2.2 調査内容

質問紙の構成は、以下の通りであった。

① フェースシート

性別, 学年, 年齢, 学部, 住まいを尋ねる5項目を用いた。

② 大学生生活の過ごし方

溝上(2009)が用いた大学生生活の過ごし方の尺度17項目。授業, 授業外の学習, 自主的学習, 読書, マンガ・雑誌や新聞を読む, クラブ・サークル活動, アルバイト, 同性や異性の友人との付き合い, テレビ, ゲーム, 通学時間などについて, 1週間に費やす時間数を(1)全然ない, (2)1時間未満, (3)1~2時間, (4)3~5時間, (5)6~10時間, (6)11~15時間, (7)16~20時間, (8)21時間以上の8段階評定で回答を求めた。

③ 時間の使い方の満足度

Benesse教育研究開発センター(2009)で用いられた日頃の時間の使い方に関する満足度を聞く質問項目。時間の使い方を100点満点で評定し, 0点から100点までの10点刻みの11段階の中から選択する方法によって回答を求めた。

④ 学校への適応感

大久保（2005）が開発した、学校への適応感尺度（居心地の良さの感覚、課題・目的の存在、被信頼感・受容感、劣等感の無さ、の4下位尺度30項目）について、「1. 全くそう思わない」から「5. とてもそう思う」までの5件法で回答を求めた。

⑤ ソーシャルスキル

相川・藤田（2005）が開発した、成人用ソーシャルスキル自己評定尺度（関係開始、解読、主張性、感情統制、関係維持、記号化、の6下位尺度35項目）について、「1. 全く当てはまらない」から「4. とても当てはまる」までの4件法で回答を求めた。

⑥ 居場所尺度

原田・滝脇（2014）が開発した、居場所尺度（所属の居場所、受容的居場所、承認的居場所、内省的居場所、解放的居場所の5下位尺度23項目）について、「1. 全く当てはまらない」から「4. とても当てはまる」までの4件法で回答を求めた。

⑦ 対人関係における重視度

大学生にとって6つの重要な人間関係（家族、友人、教員、先輩・後輩、アルバイトやボランティアなどの学外の人間関係、インターネット上の人間関係）について1点から10点までの点数を付けることを求めた。得点が高いほど重要であることを意味していた（なお、同じ得点を付けないことを求めた）。

2.3 調査期日

2014年7月～9月に調査を行った。

2.4 調査手続き

質問紙に回答するかどうかは自己決定できることを伝えた上で、授業時間内に質問紙を配布して調査を実施した。

〔梁 晋衡〕

3. 結果と考察

3.1 尺度の信頼性の検討

3.1.1 学校への適応感尺度、日常生活スキル尺度、社会的自己制御尺度

学校への適応感尺度（大久保，2005），成人用ソーシャルスキル自己評定尺度（相川・藤田，

表 3-1-1 下位尺度ごとの平均値, 標準偏差, α 係数

尺度名	Mean	SD	α
学校適応感尺度			
居心地の良さの感覚	3.36	0.78	.93
課題・目的の存在	3.52	0.74	.85
被信頼感・受容感	2.88	0.77	.89
劣等感	2.51	0.70	.80
ソーシャルスキル			
関係開始	2.47	0.64	.90
解読	2.80	0.46	.81
主張性	2.48	0.52	.79
感情統制	2.48	0.66	.75
関係維持	2.91	0.48	.67
記号化	2.76	0.58	.70
居場所感			
所属的居場所	3.05	0.66	.90
受容的居場所	2.98	0.70	.91
承認的居場所	2.86	0.62	.87
内省的居場所	3.01	0.64	.89
解放的居場所	2.97	0.66	.74

2005), 居場所尺度(原田・滝脇, 2014)に関して, それぞれの下位尺度の α 係数を求めた. 3つの尺度の α 係数, 平均値と標準偏差は表3-1-1に示した通りである. 表3-1-1の結果から, すべての下位尺度は信頼できる結果が得られた.

3.2 大学生生活の過ごし方

3.2.1 大学生生活の過ごし方のタイプ

都筑ら(2012, 2013, 2014)において, 大学生生活の過ごし方について既に因子分析を行っているので, ここでは都筑ら(2012, 2013, 2014)と同じ因子構造であるかを検討するために, Amos 20を用いて確認的因子分析を行った. その結果を表3-2-1に示した. 適合度指標は, $\chi^2=158.99$, $df=54$, $p<.001$, $GFI=.95$, $AGFI=.92$, $CFI=.88$, $RMSEA=.07$ であった. 都筑ら(2014)と同じようにほぼ信頼できる値が得られたことから, この因子構造モデルに従って, 後の検討を進めていくことにした. 因子名は以下の通りであった. 第1因子は「授業外

表 3-2-1 大学生生活の過ごし方の確認的因子分析

	因子 1	因子 2	因子 3	因子 4
1. 勉強のための本（新書や専門書など）を読む	.82			
7. 授業とは関係のない勉強を自主的にする	.67			
4. 新聞を読む	.45			
3. 異性の友だちと交際する		.58		
13. 同性の友だちと交際する		.57		
12. コンパや懇親会などに参加する		.57		
6. クラブ・サークル活動・部活動をする		.44		
11. マンガや雑誌を読む			.62	
8. ゲーム（ゲーム機・コンピュータゲームなど）をする			.40	
15. 娯楽のための本（小説や一般書など）を読む			.45	
2. インターネットサーフィンをする			.45	
14. 大学で授業や実験に参加する				.39
10. 授業に関する勉強（予習や復習、課題など）をする				.77
因子間相関	因子 1	-.10	.23	.26
	因子 2		.09	.14
	因子 3			.23

の自主的勉強」、第2因子は「対人交際」、第3因子は「インターネット・マンガ・ゲーム」、第4因子は「大学の授業・勉強」であった。

都筑ら（2013, 2014）は、大学生生活の過ごし方のタイプを6クラスタに分類し、検討を行った。そこで、本稿では都筑（2013, 2014）らと同じように、4つの下位尺度の合成得点のZスコアを用いて6クラスタを検討した。Ginkgoを用いて、2ステップのクラスタ分析を行った（Gore, 2000 ; Luyckx ら, 2008 ; Schwartz ら, 2011）。最初に、4下位尺度の標準化された得点を用いて、Ward法（マハラノビス距離）で、6クラスタを分類し、次に、得られた6クラスタの中心を用いて、K-means法でクラスタ分析を行った。

図3-2-1には、大学生生活の過ごし方4下位尺度における各クラスタの得点（Zスコア）を示した。

クラスタ1（83人）は、「インターネット・マンガ・ゲーム」は多かったが、「授業外の自主的勉強」「対人交際」は平均より少なく、「大学の授業・勉強」はほぼ平均だった。このクラスタは、インターネット等ヴァーチャルな活動を中心に過ごしている群であるといえるだろう。

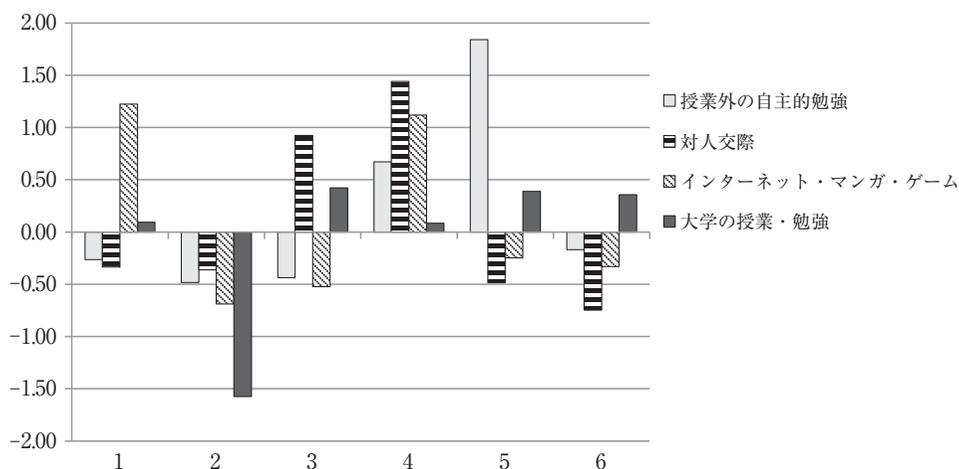


図3-2-1 クラスタ分析による生活時間の過ごし方のタイプ (Zスコア)

クラスタ2 (70人) は、「大学の授業・勉強」「授業外の自主的勉強」「インターネット・マンガ・ゲーム」「対人交際」のいずれも少なかった。このクラスタは、授業や授業外の勉強を含め、全体に活動が不活発な群であるといえるだろう。

クラスタ3 (102人) は、「対人交際」が多く、「授業外の自主的勉強」「インターネット・マンガ・ゲーム」は平均より少なく、「大学の授業・勉強」は平均より多かった。このクラスタは、大学の授業に参加していると同時に対人関係的な活動を中心に過ごしている群であるといえるだろう。

クラスタ4 (41人) は、「授業外の自主的勉強」「対人交際」「インターネット・マンガ・ゲーム」が多く、「大学の授業・勉強」は平均とほぼ同じだった。このクラスタは、大学生活における活動に対して積極的に取り組んでいる群であるといえるだろう。

クラスタ5 (49人) は、「授業外の自主的勉強」は多かったが、「対人交際」「インターネット・マンガ・ゲーム」が少なく、「大学の授業・勉強」は平均より多かった。このクラスタは、大学の授業に参加しているだけではなく、大学の授業以外の勉強に取り組んでいる群だといえるだろう。

クラスタ6 (103人) は、「大学での授業・勉強」は平均より多かったが、「授業外の自主的勉強」はほぼ平均であり、「対人交際」「インターネット・マンガ・ゲーム」は少なかった。大学の授業には出席するが、それ以外の活動にはあまり取り組まない群であるといえるだろう。

以上の結果により、都筑ら (2013, 2014) と同じようなクラスタが得られたので、クラスタ1をヴァーチャル活動群、クラスタ2を低活動群、クラスタ3を対人活動中心群、クラスタ4

を高活動群, クラスタ 5 を自主勉強中心群, クラスタ 6 を授業出席勉強群と名付けた.

[梁 晋衡]

3.3.1 大学生生活の過ごし方による実際の対人活動の差異の検討

対人関係の重要度を「家族」, 「友人」, 「教員」, 「先輩・後輩」, 「学外の人間関係」, 「ネット上の人間関係」の6つの項目別に1~10点で回答を求めた. 重要度は解答が重複しないように教示し, 回答中に重複があった場合にはその回答を無効とした. そのため, 以下の分析では他の分析に比べて調査協力者の人数が減少することになった.

学生が重視している対人関係について時間の使い方のタイプによる差を検討するために, 時間の使い方6タイプを独立変数, 重視する対人関係の得点を従属変数とした一要因の分散分析を行った(表3-3-1). その結果, 「家族」以外の対人関係項目に時間の使い方タイプによる有意差が見られた. 「友人」の項目において($F(5,370)=4.51, p<.01$)有意差が見られたので, TukeyのHSD法による多重比較を行った結果, 対人活動中心群はヴァーチャル活動群, 自主勉強中心群, 授業出席勉強群よりも得点が高いことが示された($p<.05$).

「教員」の項目においても有意差があり($F(5,370)=3.32, p<.01$), TukeyのHSD法による多重比較を行った結果, 対人活動中心群と自主勉強中心群はヴァーチャル活動群よりも得点が高いことが示された($p<.05$).

「先輩・後輩」の項目において($F(5,369)=10.37, p<.001$)有意差が見られたので, TukeyのHSD法による多重比較の結果, 対人活動中心群はヴァーチャル活動群, 低活動群, 自主勉強中心群, 授業出席勉強群よりも得点が高く, 高活動群はヴァーチャル活動群, 授業出席勉強群よりも得点が高かった($p<.05$).

「学外の人間関係」の項目においても有意差が見られ($F(5,369)=2.58, p<.05$), TukeyのHSD法による多重比較では, 対人活動中心群は自主勉強中心群よりも得点が高かった($p<.05$).

「ネット上の人間関係」の項目においても有意差があり($F(5,368)=3.60, p<.01$), TukeyのHSD法による多重比較で, ヴァーチャル活動群は自主勉強中心群, 授業出席勉強群よりも得点が高かった($p<.05$).

時間の使い方のタイプ6群のうち, 対人活動中心群は「友人」, 「教員」, 「先輩・後輩」, 「学外の人間関係」それぞれにおいて得点が高かった. 大学生生活におけるさまざまな活動(部活・サークル・バイト等)が彼らの豊かな人間関係を作り上げているといえるであろう. 自主的勉強群は, 「教員」の項目においてヴァーチャル活動群よりも教員との関わりが高い. 勉強への意

表3-3-1 大学生生活の過ごし方6タイプによる重視する対人関係の違い

対人活動の 範囲	ヴァーチャル 活動群(a)		低活動群(b)		対人活動 中心群(c)		高活動群(d)		自主勉強 中心群(e)		授業出席 勉強群(f)		F	η^2	多重比較						
	n	Mean	SD	n	Mean	SD	n	Mean	SD	n	Mean	SD				n	Mean	SD			
家族	70	8.36	1.99	48	8.17	2.36	91	8.40	1.98	34	8.76	1.62	43	8.37	1.95	90	8.87	1.74	1.21	.016	
友人	70	8.13	1.81	48	8.56	1.70	91	9.01	0.99	34	8.38	1.65	43	7.81	2.10	90	8.32	1.44	4.51**	.057	c>aef
教員	70	3.39	1.91	48	3.92	2.17	91	4.41	1.86	34	4.35	2.27	43	4.81	2.12	90	4.31	2.28	3.32**	.043	ce>a
先輩・後輩	70	5.53	2.40	48	6.29	1.95	91	7.34	1.53	34	6.76	1.97	42	5.79	2.19	90	5.61	1.86	10.37***	.123	c>abef,d>af
学外の人間関係	70	5.16	2.28	48	5.81	2.47	91	5.70	1.96	34	5.85	1.88	42	4.48	2.27	90	5.52	2.39	2.58*	.034	c>e
ネット上の人間関係	70	3.13	2.44	48	2.46	2.47	91	2.22	2.02	34	2.97	2.49	42	1.79	1.69	89	1.97	1.93	3.60**	.047	a>ef

注:*** p < .001, ** p < .01, * p < .05

識の高さが教員との関わりを強めていると考えられる。大学生生活において勉強を第1の目標として取り組んでいる自主的勉強群は「学外の人間関係」において対人活動中心群と比べて得点が低い。大学での生活を中心に置いているため、大学以外の人間関係を作る機会が少なくなるのであろう。「ネット上の人間関係」については、自主的勉強群や授業出席勉強群よりもヴァーチャル活動群の得点が高い。大学の授業や専門の勉強に取り組んでいる学生よりも日頃ネットの世界に浸っているヴァーチャル活動群の学生は、ネット上の人間関係を重視している。高活動群は、「先輩・後輩」の項目においてヴァーチャル活動群や授業出席勉強群よりも得点が高い。高活動群は授業の参加だけでなく、放課後の活動にも積極的に取り組んでいるため「先輩・後輩」の関係が深まるようである。

以上の結果から、大学生生活における「家族」以外の人間関係は対人活動中心群が一番豊かであることが明らかになった。授業への出席だけでなく、授業以外の時間を積極的に行動している対人活動中心群だからこそこの結果といえる。大学生生活において将来のために専門の勉強を重視するのは当然であるが、コミュニケーション能力を磨き、人間関係を構築するという面から考えると対人活動中心群のように大学生生活の中でさまざまなことに取り組むことが理想であることがわかる。

[早川宏子・早川みどり]

3.3.2 大学生生活の過ごし方による大学生のソーシャルスキルの差異の検討

大学生生活の過ごし方によって学生のソーシャルスキルに差があるかを検討するために、大学生生活の過ごし方6タイプを独立変数、ソーシャルスキルの6下位尺度を従属変数とした一要因の分散分析を行った(表3-3-2)。その結果、「関係開始」、「解説」、「記号化」において大学

表 3-3-2 大学生生活の過ごし方によるソーシャルスキルの違い

ソーシャル スキル	ヴァーチャル 活動群(a)		低活動群(b)		対人活動 中心群(c)		高活動群(d)		自主勉強 中心群(e)		授業出席 勉強群(f)		F	η^2	多重比較						
	n	Mean	SD	n	Mean	SD	n	Mean	SD	n	Mean	SD									
関係開始	83	2.26	0.65	70	2.58	0.62	102	2.61	0.61	41	2.77	0.63	49	2.48	0.69	103	2.31	0.59	6.60***	.069	bcd>a, cd>f
解読	83	2.70	0.50	70	2.76	0.50	101	2.88	0.41	41	2.86	0.49	47	2.94	0.43	102	2.76	0.42	2.86*	.032	e>a
主張性	82	2.43	0.47	70	2.53	0.55	102	2.49	0.49	41	2.56	0.55	48	2.62	0.66	102	2.40	0.49	1.66	.019	
感情統制	83	2.48	0.68	70	2.46	0.55	101	2.44	0.69	41	2.43	0.67	48	2.66	0.73	103	2.47	0.64	0.87	.010	
関係維持	83	2.83	0.45	70	2.85	0.53	102	2.94	0.47	41	2.95	0.47	49	3.09	0.50	103	2.87	0.47	2.24	.025	
記号化	83	2.68	0.54	70	2.74	0.57	102	2.92	0.57	41	2.90	0.56	49	2.82	0.64	103	2.61	0.56	3.83**	.042	c>f

注：*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

生活の過ごし方タイプによる有意差が見られた（関係開始： $F(5,442)=6.60$, $p < .001$, 解読： $F(5,438)=2.86$, $p < .05$, 記号化： $F(5,442)=3.83$, $p < .01$ ）。

Tukey の HSD 法による多重比較を行ったところ、「関係開始」に関して、低活動群、対人活動中心群、高活動群はヴァーチャル活動群、自主勉強中心群、授業出席勉強群よりも高く、かつ対人活動中心群と高活動群は授業出席勉強群よりも高いことが示された ($p < .001$)。「解読」に関して、自主勉強中心群はヴァーチャル活動群より高いことが示された ($p < .05$)。「記号化」に関して、対人活動中心群は授業出席勉強群より高いことが示された ($p < .01$)。

これらの結果から、大学生のソーシャルスキルにおいて、対人活動中心群、高活動群がヴァーチャル活動群、授業出席勉強群よりソーシャルスキルが高い傾向が示唆された。特に、対人活動中心群と高活動群は、ヴァーチャル活動群と授業出席勉強群より初対面における「関係開始スキル」が有意に高かった。同時に対人活動中心群が授業出席勉強群より、相手に自らの意思を伝えるための「記号化スキル」が有意に高いことがわかった。これは、対人活動中心群と高活動群が大学生活における対人活動を重視して生活を送っているためではないかと考えられる。つまり、他者との関わりが多いほど、ソーシャルスキルが高いということである。

一方、自主勉強中心群はヴァーチャル活動群より、相手の感情や意図を読みとる「解読スキル」が有意に高かった。これは、自主勉強中心群の大学生は大学での授業に参加するだけではなく、授業外の自主的な勉強の活動も行っていることが原因ではないかと考えられる。大坊(2003)によれば、解読スキルとは相手の行動から必要な情報を探り、その情報から自分の見方、ルールなどを踏まえて相手の特徴を推論することである。大学とは学びの場であるが、高校時代に比べると自由な時間が多く、自分で選択し探求する空間が大きくなった。それにより自主的な勉強の活動を行っている学生が、自らの意思で活動し、本や新聞を読みとる能力が高

いだけではなく、対人関係における読みとる能力である解読スキルも高くなると考えられる。

都筑ら (2013, 2014) の研究でわかったように、ヴァーチャル活動群は、いろいろな場面での能力とスキルが低かった。本研究においても、ヴァーチャル活動群のソーシャルスキルの得点は他群より低かった。この群は、インターネット・マンガ・ゲームなどの活動を中心に過ごしている学生である。このようなヴァーチャル活動を活発に行っている一方、さまざまな困難に直面していることが想像できる。今後、こうした学生への対応が求められるだろう。

[梁 晋衡]

3.3.3 大学生生活の過ごし方による居場所感の差異の検討

時間の使い方によって学生の居場所感に差があるかどうかを検討するために、時間の使い方 6 タイプを独立変数、居場所感の 5 つの下位尺度を従属変数とした一要因の分散分析を行った (表 3-3-3)。その結果、居場所感の下位尺度のいずれにも時間の使い方タイプによる有意差がみられたので、下位尺度ごとに Tukey の HSD 法による多重比較を行った。その結果、「所属的居場所感」($F(5,440)=6.43, p<.001$) では、対人活動中心群、高活動群が、ヴァーチャル活動群、授業出席勉強群よりも高かった ($p<.05$)。「受容的居場所感」($F(5,439)=5.21, p<.001$) では、対人活動中心群、高活動群が、ヴァーチャル活動群よりも高かった ($p<.05$)。「承認的居場所感」($F(5,440)=12.31, p<.001$) では、低活動群、対人活動中心群、高活動群、自主勉強中心群が、ヴァーチャル活動群よりも高く ($p<.05$)、対人活動中心群、高活動群が、授業出席勉強群よりも高かった ($p<.05$)。「内省的居場所感」($F(5,441)=4.56, p<.001$) では、対人活動中心群、自主勉強中心群が、ヴァーチャル活動群よりも高く ($p<.05$)、

表 3-3-3 大学生生活の過ごし方 6 タイプによる居場所感の違い

居場所感	ヴァーチャル活動群 (a)		低活動群 (b)		対人活動中心群 (c)		高活動群 (d)		自主勉強中心群 (e)		授業出席勉強群 (f)		F	η^2	多重比較						
	n	Mean	SD	n	Mean	SD	n	Mean	SD	n	Mean	SD				n	Mean	SD			
社会的居場所																					
所属的居場所	82	2.82	0.77	70	2.99	0.62	102	3.26	0.52	41	3.34	0.48	49	3.02	0.83	102	2.97	0.60	6.43***	.068	cd>af
受容的居場所	82	2.71	0.70	70	2.94	0.69	102	3.19	0.62	40	3.14	0.52	48	3.06	0.82	102	2.92	0.70	5.21***	.056	cd>a
承認的居場所	82	2.51	0.65	70	2.88	0.58	102	3.13	0.54	41	3.07	0.54	49	2.97	0.70	102	2.74	0.54	12.31***	.123	bcd>a, cd>f
個人的居場所																					
内省的居場所	82	2.80	0.64	70	2.93	0.64	102	3.09	0.61	41	3.14	0.56	49	3.27	0.65	103	2.97	0.62	4.56***	.049	ce>a, e>b
解放的居場所	81	2.86	0.67	70	2.89	0.57	102	3.08	0.69	41	3.02	0.61	49	3.19	0.67	103	2.90	0.67	2.55*	.028	

注：*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

自主勉強中心群が、低活動群よりも高かった ($p < .05$)。「解放的居場所感」($F(5, 440) = 2.55$, $p < .05$)では、時間の使い方タイプによる差は見られなかった。

原田・滝脇(2014)は、居場所感を社会的居場所(3要素)と個人的居場所(2要素)からとらえている。社会的居場所とは、他者から得られる自己対象に触れることにより、自己の存在や自分らしさを確認できることで自己にまとまりを与えることのできる場所であり、①所属的居場所(何らかの集団やグループに所属していることで、帰属意識を持ち、自己の存在が安定していることを実感できる場)、②受容的居場所(他人に愛され、無条件でありのままの自己が受け入れられていることを実感できる場)、③承認的居場所(自分の力を発揮し、その成果・業績が他者に認められたり、他者の役に立ったりすることで、自己を価値あるものとして実感できる場)から成る。

また、個人的居場所は、一人になることで、情緒を安定させたり、自己受容したりすることにより、自己の存在を確認し、自分らしさを取り戻せることで自己にまとまりを与えることのできる場所であり、①内省的居場所(自己について客観的に思考や内省を行い、自己を再構成する場)、②解放的居場所(現実社会から逃避し、自己に休息とエネルギーが補給される場)から成る。

今回得られた居場所感の結果を、「時間の使い方」のタイプの違いから検討してみると、対人活動中心群、高活動群の2群は、帰属意識を持った集団に属していて、それは、自己の存在の安定感が得られる場、ありのままの自己が受け入れられる場、自己を価値あるものとして実感できる場として実感されていることが示唆された。また、対人活動中心群、自主勉強中心群の2群は、自己について客観的に思考や内省を行い、自己を再構成する場を、対人関係または自己自身に持っていることが示唆された。ヴァーチャル活動群は、解放的居場所感以外の4つの社会的居場所感が他の活動群に比べて低かったが、この活動群が文字通り実生活の中での居場所感がないことが示唆される。しかし、解放的居場所感では他の群との差がなかったことから、実生活で居場所を持たず、他者との接触を最小限にすることが、この群の学生が学生生活を送るための一種の「防衛」なのかもしれない。この点に関しては今後さらなる検討を要する。

[宮崎伸一]

3.4 時間の使い方と学校適応感の影響過程

3.4.1 分析方法

大学生の時間の使い方と学生の学校への適応との関連を統合的に検討するために構造方程式モデリングを用いたパス解析を行った。時間の使い方は直接学校への適応に影響するだけでな

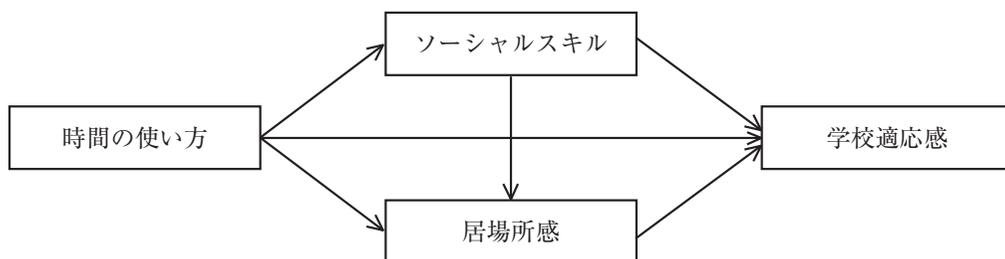


図 3-4-1 時間の使い方による学校適応感への影響過程の仮説モデル

く、ソーシャルスキルと居場所感に影響し、ソーシャルスキルと居場所感が学校への適応を促進するという影響過程がモデルとして考えられた(図 3-4-1)。またソーシャルスキルは居場所感の形成に影響があることも予測された。

3.4.2 分析結果

まず今回の分析で用いた尺度の平均値, 標準偏差, 相関を表 3-4-1 に示した。

次に図 3-4-1 に示した仮説に基づき Amos20 を用いて構造方程式モデリングによるパス解析を行った。有意でないパスを取り除き分析を繰り返した結果, 図 3-4-2 に示した結果が得

表 3-4-1 各尺度の平均値, 標準偏差, 相関

	対人交際	娯楽	大学の勉強	スキル	ソーシャル	社会的居場所感	居場所感	個人的居心地の良さの感覚	居心地の良さの感覚	課題・目的の存在	受容感	被信頼感	劣等感	Mean	SD
自主的勉強	-.10	.24***	.25***	.19***	-.02	.17***	.00	.23***	.12*	-.13**	2.55	1.24			
対人交際		.11*	.15**	.23***	.37***	.07	.41***	.27***	.31***	.03	3.14	1.23			
娯楽			.22***	.05	-.08	.06	-.09	-.07	-.11*	.03	2.82	1.02			
大学の勉強				.09	.07	.09	.06	.17***	.05	-.02	4.44	1.33			
ソーシャルスキル					.51***	.44***	.41***	.39***	.46***	-.30***	2.65	0.35			
社会的居場所感						.50***	.57***	.41***	.50***	-.12*	2.97	0.61			
個人的居場所感							.28***	.33***	.22***	-.28***	2.99	0.62			
居心地の良さの感覚								.61***	.64***	-.13**	3.36	0.77			
課題・目的の存在									.50***	-.16**	3.52	0.74			
被信頼感・受容感										-.06	2.88	0.77			
劣等感													2.50	0.70	

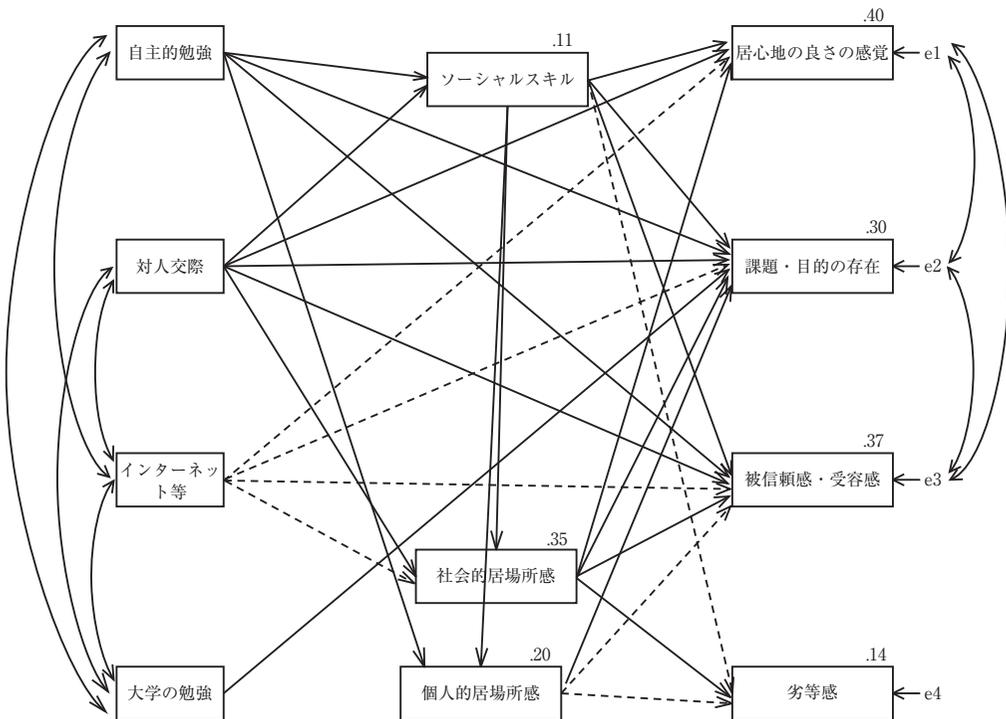
注: *** p < .001, ** p < .01, * p < .05

られた。図3-4-2ではパスの多さから、得られたパス係数を表3-4-2に示した。以下のモデルの適合度は $GFI = .96$, $AGFI = .88$, $CFI = .94$, $RMSEA = .09$ と $RMSEA$ を除いて十分な適合度が得られた。 $RMSEA$ においても $.10$ を下回っているため許容範囲と判断された。

この結果から自主的勉強に時間を使うことは、課題・目的の存在、被信頼感・受容感という学校への適応感を直接的に高めることが示された。また、自主的勉強に時間を使うことはソーシャルスキルと個人的居場所感を高め、間接的に学校への適応に寄与していることが示された。

対人交際に時間を使うことは、居心地のよさの感覚、課題・目的の存在、被信頼感・受容感という学校への適応感を直接的に高めることが示された。また、対人交際に時間を使うことはソーシャルスキルと社会的居場所感を高め、間接的に学校への適応に寄与していることが示された。

インターネット・マンガ・ゲームに時間を使うことは、居心地のよさの感覚、課題・目的の存在、被信頼感・受容感という学校への適応感を直接的に低めることが示された。また、イン



注 : Fit Index: $GFI = .96$, $AGFI = .88$, $CFI = .94$, $RMSEA = .09$, 実線は正の関連。破線は負の関連を示す。図中の数値は R^2 値を示す。

図3-4-2 本研究から得られた大学の時間の使い方と適応の関連モデル

表 3-4-2 各尺度のパス係数

説明変数	基準変数						
	ソーシャル スキル	社会的 居場所感	個人的 居場所感	居心地の 良さの感覚	課題・目的 の存在	被信頼感・ 受容感	劣等感
自主的勉強	0.215***		0.089*		0.201***	0.128***	
対人交際	0.246***	0.28***		0.234***	0.182***	0.156***	
娯楽		-0.13**		-0.1*	-0.16***	-0.14***	
大学の勉強					0.09*		
ソーシャルスキル		0.458***	0.423***	0.164***	0.167**	0.267***	-0.26***
社会的居場所感				0.393***	0.182***	0.334***	0.125*
個人的居場所感					0.122**	-0.09*	-0.23***

注：有意なパス係数 (***) $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$) のみを記述。

ターネット等に時間を使うことは社会的居場所感を低め、間接的に学校への適応を抑制していることが示された。

大学での勉強に時間を使うことは課題・目的の存在を直接的に高めることが示された。

[永井暁行]

4. 総合的考察

本研究の目的は、次の2点であった。第1は、対人活動中心群がその他の群と比較して、実際の人間関係・対人活動において、どのような特徴を持つのかを明らかにすることであった。第2は、大学生活をどのように過ごしていくかという時間の使い方が、ソーシャルスキルや居場所感を通じて学校適応感にいかなる影響を及ぼすかを明らかにすることであった。

第1の点に関して、対人活動中心群は他の5群と比較して、友人、教員、先輩・後輩、学外の人間関係のいずれにおいても、最も得点が高く、大学生活におけるさまざまな活動(部活・サークル・バイト等)の中で豊かな人間関係を作り上げていることが明らかになった。

上記のような特徴を踏まえて、第2の点として、そのような人間関係の構築とソーシャルスキルや居場所感、学校適応感との関係を検討するために、モデルの検証を行った。その結果、時間の使い方はそれぞれ異なる学校適応感への影響を示した。特に自主的な勉強と対人交際に時間を使うことはソーシャルスキルや居場所感の促進につながり、結果として学校での適応も促進されることが示された。一方でインターネット等の娯楽に時間を使うことによって社会的居場所感が抑制され、また学校への適応も低減されることが示唆された。

都筑ら（2013, 2014）の調査から対人活動を中心に大学生活を送っている大学生が適応的であると示されてきたが、本研究ではそれぞれの時間の使い方が学校適応感にどのように影響するのかを検討した。その結果、対人活動中心群で特に顕著である対人交際に時間を使うことは学校への適応に肯定的な影響を与えることが示された。大学生は対人交際の時間を通して居心地の良さや周囲からの信頼感や受容感を得ていることが本研究の結果からうかがえる。この結果はこれまでの都筑ら（2013, 2014）を支持する結果であるといえる。また、対人交際は学校適応感における課題・目的の存在についても肯定的な影響を及ぼしていることが示された。大学生が対人交際から得られる適応は居心地の良さや他者からの信頼という社会的な適応だけでなく、個人的な適応も含まれていることを示唆しているものと思われる。大学生は他者との関わりを通じて自身の大学での課題や目的を見直しているという過程が存在している可能性がある。

また大学での活動は対人関係だけでなく、その本分といえるべき学業が存在する。この学業に費やす時間については、学校への適応に影響するのは自主的な勉強であり、授業に出席することは学校への適応にほとんど影響しないという結果が得られた。

一方で、インターネットや漫画、ゲームなどの娯楽に時間を使うことは学校への適応を抑制することが示された。これらの活動は対人交際のように他者との関わりを形成するものでもなく、また自主的な勉強のように何らかの目標を達成するものでもない活動であると考えられる。そのため、この活動に時間を費やすほど、相対的にその他の活動の時間を減らすことになってしまうと考えられる。

さらに本研究ではソーシャルスキルや居場所感による、間接的な時間の使い方の影響が検討された。ソーシャルスキルはいずれの学校適応感にも肯定的な影響を及ぼしていたが、そのソーシャルスキルを促進する時間の使い方は本研究からは自主的な勉強と対人交際であった。相川・藤田（2005）によるとソーシャルスキルは①具体的な対人場面で用いられるもの、②対人目標を達成するために使われるもの（対人目標とは、当該の対人場面から手に入れたいと思う成果のことである）、③相手の反応の解読や、対人目標の決定、感情の統制などのような「認知過程」と、対人反応の実行という「行動過程」の両方を含むもの、④言語的ないしは非言語的な対人反応として実行されるもの、⑤学習によって獲得されたもの、⑥自分の対人反応と他者の反応とをフィードバック情報として取り入れて、変容してゆくもの、⑦不慣れな社会的状況では意識的に実行されるが、熟知した状況では自動化しているもの、などの要素を含んだものであると特徴づけられている。ソーシャルスキルの持つこれらの特徴からも、大学において対人関係に時間を割いて活動することはその習得のために重要であることが指摘できる。加え

て、自主的な勉強をすることもソーシャルスキルの獲得に良い影響があることが示唆された。自分で積極的に勉強をしていくためには適切な目標設定や自己コントロールが必要となることが予想される。そのような自己制御の能力が自主的な勉強を通して培われているのではないだろうか。

社会的居場所感は居心地の良さ、課題・目的の存在、被信頼感・受容感を高めていることが示された。一方で、社会的居場所感は劣等感も高めていることが示された。他者を意識して自分の居場所を感じれば、他者との比較が否応なく生じ、劣等感を高めてしまうことが示唆された。そのため、対人交際に時間を使うことは社会的居場所感を高めて、概ね適応的ではあるが、同時に劣等感も高まると考えられる。一方で、インターネット等の活動は社会的居場所感を低めるものの、そのために劣等感を感じなくてすむといえる。ただし、青年において劣等感を感じることは必ずしも避けるべきことではない。むしろ、ネガティブな感情を低減させるために自己の否定的な側面から目を逸らせることは、青年の人格発達において必ずしも有用であるとはいえない。大学生が居場所感を感じていると同時に劣等感を感じていることが本研究から示されたが、この劣等感を他者との間で経験することは発達上意義深いものである可能性がある。

個人的居場所感は課題・目的の存在を高め、劣等感を抑制するが、被信頼感・受容感を低減してしまうことが示された。個人的居場所感は一人でいられる場所や時間であり、自主的な勉強に時間を使っているほど、この個人的居場所感が高まることが示された。自主的な勉強に時間を使うことで直接的にも課題・目的の存在は高まるが、個人的居場所感が高まることによっても高められることが示唆された。また個人的居場所感と対照的に劣等感を抑制することが明らかになった。一人でいられる時間や空間は大学生が自己を省みるために重要となることが予想される。そのような時間や空間によって大学生が劣等感を低減していることが予想される。社会的居場所感と個人的居場所感は二律背反なものではないため、他者との関わりによる居場所と一人になれる居場所のバランスによって大学生は適応を維持しているものと思われる。

[永井暁行]

文 献

- 相川充・藤田正美(2005)成人用ソーシャルスキル自己評定尺度の構成, 東京学芸大学紀要 第1部門, 教育科学 56: 87-93.
- 大坊郁夫(2003)社会的スキル・トレーニングの方法序説—適応的な対人関係の構築, 対人社会心理学研究 3: 1-8.
- 藤本学・大坊郁夫(2007)コミュニケーション・スキルに関する諸因子の階層構造への統合の試み, パ

- ーソナリティ研究 15 : 347-361.
- Gore, P. A. (2000) Cluster analysis. In H. E. A. Tinsley & S. D. Brown (Eds.), *Handbook of applied multivariate statistics and mathematical modeling*. San Diego, CA: Academic Press. pp.297-321.
- 原田克巳・滝脇裕哉 (2014) 居場所概念の再構成と居場所尺度の作成, 金沢大学人間社会学域学校教育学類紀要 6 : 119-134.
- 廣岡秀一・元吉忠寛・小川一美・斎藤和志 (2000) クリティカルシンキングに対する志向性の測定に関する探索的研究 (1), 日本社会心理学会第41回大会発表論文集 : 26-27.
- 廣岡秀一・元吉忠寛・小川一美・斎藤和志 (2001) クリティカルシンキングに対する志向性の測定に関する探索的研究 (2), 三重大学教育実践総合センター紀要 20 : 93-102.
- Luyckx, K., Schwartz, S. J., Berzonsky, M. D., Soenens, B., Vansteenkiste, M., Smits, I., et al. (2008a) Capturing ruminative exploration: Extending the four-dimensional model of identity formation in late adolescence. *Journal of Research in Personality*. 42 : 58-82.
- 溝上慎一 (2009) 「大学生生活の過ごし方」から見た学生の学びと成長の検討—正課・正課外のバランスのとれた活動が高い成長を示す—, 京都大学高等教育研究 15 : 107-118.
- 森真依子・東條光彦・佐々木和義 (2005) ストレスに強い人格特性について—大学生用ハーディネス尺度の作成, 発達心理臨床研究 11 : 91-95.
- 大久保智生 (2005) 青年の学校への適応感とその規定要因 : 青年用適応感尺度の作成と学校別の検討, 教育心理学研究 53 : 307-319.
- Schwartz, S. J., Beyers, W., Luyckx, K., Soenens, B., Zamboanga, B. L., Forthun, L. F., & Waterman, A. S. (2011) Examining the light and dark sides of emerging adults' identity: A study of identity status differences in positive and negative psychosocial functioning. *Journal of Youth and Adolescence*. 40 : 839-859.
- 都筑学・早川宏子・村井剛・早川みどり・金子泰之 (2011) 大学生生活の過ごし方のタイプとその心理的特徴についての検討, 中央大学保健体育研究所紀要 29 : 7-33.
- 都筑学・早川宏子・村井剛・早川みどり・金子泰之 (2012) 大学生生活の過ごし方のタイプとその心理的特徴についての検討 (2), 中央大学保健体育研究所紀要 30 : 1-33.
- 都筑学・早川宏子・宮崎伸一・村井剛・早川みどり・金子泰之・永井暁行・梁晋衡 (2013) 大学生生活の過ごし方のタイプとその心理的特徴についての検討 (3), 中央大学保健体育研究所紀要 31 : 1-34.
- 都筑学・早川宏子・宮崎伸一・村井剛・早川みどり・永井暁行・梁晋衡 (2014). 大学生生活の過ごし方のタイプとその心理的特徴についての検討 (4), 中央大学保健体育研究所紀要 32 : 11-34.